（教育委員会用）

平成２９年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解（心のバリアフリー）の推進事業」成果報告書

| 団体名 | 滋賀県教育委員会 |
|---|---|

## Ⅰ　概要

### １　事業の概要

視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由の県立特別支援学校 10 校をモデル校に指定し、各々の学校で実施している小・中・高等学校との学校間交流や居住地校交流等の場を利用し、交流及び共同学習を行った。

（スポーツ）

「サウンドテーブルテニス」「フロアバレー」「キンボール」「ボッチャ」等の障害者スポーツや「ホッケー」「ダンス」「バスケットボール」等を交流及び共同学習に取り入れ、特別支援学校と小・中・高等学校の児童生徒が、身体を動かすことの喜びや、同じ目的に向かって協力する一体感などを味わうことを目指した。また、障害者スポーツ専門家や障害者アスリートを交流及び共同学習に招き、障害者スポーツの練習や試合の進め方などの指導を受けることで、障害者スポーツの楽しさを体感するとともに、障害に対する理解を深める契機とした。

（文化・芸術）

陶芸の専門家を招き、特別支援学校の児童生徒と地域の小・中学校に在籍する聴覚障害のある児童生徒が共に作陶作業に取り組むことで、互いに学び合う機会とした。また、特別支援学校と地域の小学校や高等学校と音楽会等を開催し、楽器の演奏会や楽器に合わせて歌やダンスを行うことで、音楽を通じた交流活動を実施した。

### ２　事業の成果

（スポーツ）

地域の小学校との「ダンス」や「風船遊び」を通じた交流会において、交流会前に特別支援学校の施設見学と事前の顔合わせを実施したことで、特別支援学校がどんな学校か知らなかった児童も、学校見学や児童との触れ合いを通じて特別支援学校のことや児童たちのことについて知る機会となった。また事前交流での顔合わせの際には特別支援学校の友だちに声をかけられなかったり、手をつなげなかったりした児童も、事前交流後の事後学習の中で「次は話しかけよう。」等とそれぞれに目標を持ち、本交流に向かうことができた。さらに本交流会後の感想発表では、「特別支援学校の人たちといろんなゲームができてうれしかった。協力してできた。楽しめて良かった。また一緒にいろんなゲームがしたい。」「一緒に楽しめて良かった。これで終わりだけれど、また会いたい。」等の感想があった。

また地域の小学校との「ストラックアウト」を通じた交流会では、交流会前の体育の授業で障害者スポーツの専門家（大学准教授およびアシスタントの学生）を招き実技指導を受けた。その後、小学校との交流会に再度専門家を招き、共に活動する中で、両校児童が共に障害者スポーツについて学び、お互いに理解しあう機会とした。この取組により、地域等との交流の機会が希薄になりがちな特別支援学校の児童にとって貴重な学びの機会となり、さらに地域の小学校の児童や、大学生にとっても特別支援学校に在籍する児童の障害や特性の理解につなが

り、共生社会の実現に向けた貴重な機会となったと考える。
　地域の中学校との「キンボール」を通じた交流では、双方の生徒が司会を務め、生徒が主体となって開閉会式を行うなど、両校が協力しながら活動を進めた。また活動中は、生徒同士名前を呼び合って関わり合うなど、積極的に交流を深めることができた。

（文化・芸術）
　地域の小学校との交流会では、事前に各校の担当者間で打合せをおこない、互いの児童の状況について伝え合うことで、クラスごとによりよい交流の持ち方を計画し、交流を深めることができた。また交流会で実施した音楽会では、カホンやマラカス、鳴子やハンドホーンといった打楽器の中から、両校の児童が自分の好きな楽器を選び合奏に取り組み、共に活動を楽しむことができた。
　聴覚障害特別支援学校と地域の小中学校の難聴児童生徒と作陶を通じた交流では、陶芸の専門家を招き土面作りに取り組んだ。普段友だちと関わることが苦手な地域の児童が、終了後「仲良くなった友だちができた！好きな先生もできたよ！」と迎えに来た母親に友だちと先生の名前を嬉しそうに伝える姿があった。土粘土という可塑性のある素材を使った活動は、発達段階に関わらず、どの児童生徒も集中して作ることができた。また、講師の方々にアドバイスを受けながら思い思いの作品を作り、それぞれの個性が光る作品が出来上がった。また、指導を受けた陶芸の専門家から、「聴覚障害のある子どもたちは、『見ること』に優れていると感じた。楽しい発想、個性的な発想で陶芸に取り組んでいた。」といった声をいただいた。

**３　事業の課題とその解決のために必要な取組**

　地域の学校との交流及び共同学習の取組を年間計画に位置付け、計画的、組織的に継続した取組にする必要がある。また事業実施に際しては、事前の教師間の打ち合わせと準備を丁寧に行うことが重要であり、実施後には、両校間で総括を行い、授業評価や内容に改善をすすめる必要がある。
　作陶を通じた交流では、発達段階に関わらず子どもたちが集中して活動に取り組むことができた。次年度においても自由度の高い活動や教材の研究や検討を行い、多様な子どもの実態に合わせた活動となるよう工夫が必要となる。
　しかしながら、小学部の高学年部では修学旅行、フローティングスクール、宿泊学習、卒業式等、高等部においてはさらに実習等の学校行事が多く、本事業にかかる新しい取組や回数の増は検討が不十分な状態であり、学校全体で行事の精選を行う中で、交流及び共同学習の重要性を確認し、行事に取り入れていく必要がある。
　また、中学校から特別支援学校に入学してきた生徒の中には、同級生との関わりを避ける生徒がおり、どのような交流の持ち方がよいか引き続き検討が必要である。
　さらに、交流及び共同学習への学校関係者以外の参加がまだまだ少ないことから、保護者や地域住民が参加しやすい事業となるよう、事業の趣旨を啓発するとともに、事業の開催を周知するなどして参加を促し、地域に開かれた教育課程づくりを目指していきたい。